

助産婦教育に携わって

浅生 慶子

九州大学医療技術短期大学部専攻科助教授

恩師の古賀千鶴子先生に、「りれ一随筆」のバトンを渡され、大変光栄に思うとともに、学生時代にかえったような緊張感をおぼえます。

私が先生の教えを受けたのは昭和31年ですから、あれからもう36年の歳月が流れたことになります。当時先生は、30代の一番脂の乗った年代だったのでしょうか、外来で手を取りテキパキと指導して下さいったことが昨日のこのように思い出されます。

しかし今思えば、先生は、新制度の助産婦教育をはじめられたばかりで随分ご苦労も多かったのではないのでしょうか。後に先生と同じ立場に立った時そのご苦労が痛い程理解できました。

助産婦学校開校の思い出

昭和50年、厚生省直轄の助産婦学校としては全国で第3番目に、国立小倉病院附属看護助産学校助産婦科が開校しました。以来17年間、私は教育主事として、助産婦学生の教育に従事してまいりました。

開校までは、まさに難産で、何度もくじけそうになりましたが、多くの方々に支えられ、無事誕生し、平成4年3月までの卒業生数は、478名になりました。

看護学校教員の経験はありましたが、助産婦教員としての経験がなかった私にとっては不安でいっぱいスタートでした。しかし、恩師の勝島喜美先生、宮里和子先生、先輩校(国立大蔵病院附属看護助産学校助産婦科)の教育主事の松本八重子先生のご指導をいただき、何とかつとめてまいりました。また開校までの1年間は、公衆衛生院で同室

だった大迫郁子さんのはげましが大きな心の支えでした。

助産婦教育協議会では、近藤潤子先生をはじめ、先輩諸先生方に多くのことを学びました。おかげ様で、助産婦教育新米だった私も少しずつ助産婦教育が見えてまいりました。

その後、平成4年4月から、母校の九州大学医療技術短期大学で勤務することになり、母校の80年の歴史の重味をずっしりと感じております。

助産学会学術集会に向けて

そして、本年は日本助産学会第7回学術集会の会長をさせていただくことになっております。私にとっては責任が重すぎて、任務を果たすことができるかどうか大変不安ですが、これまで私を育てて下さった方々へのご恩返しだと思い、一生懸命つとめたいと思います。

すでにニュース等でご案内をしておりますが、メインテーマを「人間性の原点とかかわる助産婦」として、準備をすすめております。

近年の産科学の進歩に伴って、私たち助産婦の行なう業務も大きく変化してきました。と同時に、女性の価値観の多様化、母子をとりまく社会の変化などにより、助産婦に求められるものにも変化が現われてきたように思います。そこで今一度、助産とは、助産婦の原点とは、について考えてみたいと思います。多数のみなさんご参加を期待しています。

助産婦教育に対する期待

最近、看護界のうれしいニュースとして、4年



制大学の開校があります。長年の私たちの希望が叶えられ、大変嬉しいことではありますが、気になることは、助産婦教育がどう位置づけられるかということです。出生率が低下している現在、助産婦をこれ以上ふやす必要はないという助産婦不要論が、看護の仲間から出ていることも事実です。

最も理解し合えるはずの仲間から、「助産婦はいばっている」「助産婦は看護ができない」「つぶしが効かない」などと悪い評価が多くきこえてくるのはなぜでしょうか。助産婦の1人として大変悲しく思います。

助産婦の業務を知らない人たちが言うことだから放っておいてよいという意見もありますが、私は、今一度謙虚に反省してみる必要があるのではないかと思います。

毎年、入学してくる学生に、なぜ助産婦を希望したか、そのきっかけを調査した結果、第1位は、いい助産婦との出会いとなっています。今後、助産婦を目指す多くの後輩を期待するためには、看護学生や看護婦に対する「助産婦のかかわり」にポイントがあるように思います。

現在のように多忙な業務のかたわら、学生指導に時間をさくことは、大変であることは理解できますが、もう少し学生の立場に立って、学生に目を向けてほしいと希望します。

助産婦は柔軟性がないといわれますが、私自身も含めて否定できない気がします。母児の命をあずかる助産婦としては、確かな技術が必要なことはいうまでもありませんが、伝統にのみ固執していれば、新しい発想も技術も生まれえないのではないのでしょうか。柔軟性のある助産婦を期待したい

ものです。

また、看護の専門性が言われて久しいのに、助産婦は、専門性を失いつつあるような気がします。業務と、責任のとり方を明確にすることを急がなければならない、そして名実ともに専門職として位置づけられるよう努力したい、と思います。

平成2年にカリキュラムが改正され、新しい時代に対応できる助産婦を目指してスタートしましたが、改正前の諸問題の解決はなかなかむずかしいのが現実です。

学生は、あいも変わらずゆとりがなく、分娩介助、分娩介助と目の色を変え、疲れきった表情です。若々しく生き生きした姿はみられません。このような姿に接すると、学生自身には何の責任もないのに、と胸が痛みます。いずこの学校も同じ悩みだと思いますが、これでほんとうの教育といえるのだろうか、と暗い気持ちになります。

なんとか智慧を出し合って、よい教育をしていかねばならないと切実に思います。4年制の看護大学が、助産婦教育にとっても充実したよりよいものであるよう、期待したいと思います。そのためには、その教育のあり方についても私たち助産婦が提言していくことが必要でしょう。

* * *

今回は、^{むなかつ}宗像(福岡県)の地に根をおろし、生き生きと助産婦活動をされ、地域住民から「宗像の母」と慕われている、むなかつ助産院長の賀久はつさんにバトンタッチします。開業までのご苦勞話や、これから若い人々が開業する場合に参考になるお話などをぜひきかせて下さい。